

備陽史探訪

第92号

発行

 備陽史探訪の会
 福山市多治米町5-19-8
 TEL. (0849) 53-6157

笠岡の町

田口義之

最近、ひよんなことから福山の隣町、笠岡で二度ほど講演の機会を持った。「近くて遠い町笠岡」以下はその時の覚書である。

笠岡の地名の由来は、遠く古代にさかのぼる。笠岡の北部は高梁川の支流、小田川の流域に含まれるが、この地には弥生時代以来有力な豪族がいて、古墳時代に入ると、この豪族は吉備氏と密接な関係を持ち、「笠臣」を称えるようになる。これが笠岡の「笠」の直接的な由来である。ただし、この「笠」が何を意味するのは明らかでない。

中世に入ると、笠岡の繁栄は南部に移る。笠岡西部の「陶山」には平安時代の末期には藤原姓を称える武士団が発生し、平氏の台頭と共に史上に現れる。これが鎌倉時代から室町時代末期まで笠岡一帯を支配した陶山氏である。

陶山氏が一躍歴史の表舞台に登場したのは南北朝時代のこと、元弘の変に際して、陶山藤三義高は同じく備中の武士小見山次郎と共に、後醍醐天皇の簞る笠置山に夜討ちを懸けこれを落した。しかし義高の武功は報われることなく、陶山氏は滅び行く鎌倉幕府と運命を共にし、近江番場宿で六波羅探題と共に切腹して果てた。

だが一族の中には笠岡に残って勢力を維持したものもいた。義高の後継者の中には、將軍奉公衆（直参旗本）として室町幕府に仕える者も現れる。これが後期陶山氏である。室町時代の陶山氏は、前代以上の勢力を持ち、幕府の記録には將軍奉公衆の中では備後の宮・杉原氏、安芸の小早川氏と並ぶ「分限者」である、とある。

陶山氏をはじめ金浦に本拠を置いていたが、後には笠岡旧市街の西に聳える竜王山に城を移した。これが笠岡山城で、現在の笠岡はこの陶山氏の城下町に端を発している。しか

し陶山氏は戦国時代の中頃、忽然と史上から姿を消す。理由は不明だが、大内・尼子の抗争の中で、敗者としての道を歩んだものと想像される。

戦国時代の後期になると、笠岡には海賊衆の村上氏の勢力が及び、今の古城山に海賊城を築く。これが村上氏の笠岡城である。笠岡に進出した村上氏は三島（能島・来島・因島）村上氏のなかで最強の勢力を誇った能島村上氏で、記録によるとこの地に城を築いたのは、能島村上武吉の叔父村上隆重であるという。

元和五年（一六一九）、笠岡は備後十萬石の大名に封ぜられた水野氏の領分となる。この地が備中にもかかわらず、水野氏の領分とされたことについては、面白い逸話が伝わっている。初代藩主水野勝成が將軍秀忠から受けた内示には、笠岡の名はなく、尾道が入っていた。それを勝成は笠岡と替えてくれるよう頼み、笠岡が備後十萬石に含まれるようになったのだ、という。

しかし水野氏の治世は五代、約八十年で終わり、笠岡は「天領時代」を迎える。これは水野氏の改易後行われた元禄検地の結果、旧水野領は十五萬石と決定され、水野氏の後に福山城主となった松平氏にはその内十萬石だけ渡され、残りの五萬石は

幕府の直轄地「天領」とされたためである。

天領としての笠岡は、幕府の代官所が置かれたため、新たな発展を遂げることとなる。代官所は水野氏の時代の町奉行所の跡地に置かれ、これが後に述べる小田県庁に引き継がれることになる。初代の代官には福山代官であった山木与三左衛門が横滑りに任命された。

笠岡代官として有名なのは早川八郎左衛門と井戸平左衛門である。早川代官は「近世の名代官」と謳われた人物で、各地で治績を挙げ、笠岡では国学者小寺清先を登用して郷学「敬業館」を興した。井戸代官は一般に「芋代官」として知られるが、実際笠岡にいたのはわずかな期間に過ぎない。この地で病死したため、笠岡の威徳寺に墓所があり、さまざまな伝説を残した。

笠岡で特筆されるのは、明治維新後、この地に小田県の「県庁」が置かれたことである。小田県は福山県と備中諸郡を統合した「深津県」が改称されたもので、当初県庁は福山（備後国深津郡）に置かれていたが、初代の権令（県知事）矢野光儀の建議により、笠岡が県庁所在地となり、笠岡の属する小田郡の小田を採って「小田県」とされた。明治五年のことである。

小田県の政治は、権令の矢野光儀が窪田次郎などの民権家の意見を探り入れたため、極めて先見性あふれたもので、小田県臨時県議会の開催や、啓蒙所の開設など見るべきものが多い。しかし、このことが原因で小田県はわずか三年で岡山県に併合されてしまう。

当時、明治新政府は「地租改正」を実施中であつたが、小田県では窪田次郎などの反対があつて中々進捗しなかつた。このことに業を煮やした新政府は、「鬼県令」と恐れられていた高崎五六の下、整然と地租改正が行われていた岡山県に編入することとでこの地域の地租改正を実施しようとした。

岡山県との合併によつて旧小田県の地租改正は政府の目論み通り、速やかに実施され、その終了と共に旧福山藩領の備後六郡を岡山県から広島県に編入、ここに現在の行政区画が確定するのである。時に、明治九年四月のことであつた。

歴史の教えてくれるもの

木下 和司

最近、新聞紙上を賑わせている記事に大銀行や大企業の合併がありまゝ。国内でも富士銀行、第一勧銀、日本興行銀行の持株会社設立、旧財閥の壁を乗り越えた住友銀行、さくら銀行の合併等々、日々、驚かされている半導体産業でも、つい最近、日立とNECがDRAMと呼ばれる素子の開発、生産に関して合併会社を設立するという発表に驚かされたばかりです。

なぜ最近になってこんな現象がおき始めたのでしょうか。その理由は世界的な経済競争の激化で、生き残れる企業の数に限られてきた為です。つまり企業間競争に生き残るために規模のメリットを優先させようとしている企業が増えていくのです。こんな風を書いてくると、経済評論のようで歴史と無関係に思われるかもしれないませんが、これから今までのお話と歴史との関わりを書きます。

私自身も企業社会に生きてるものとして、世界的な競争による圧力の増加と、サラリーマンとしての自身の立場に危機感を感じています。だ

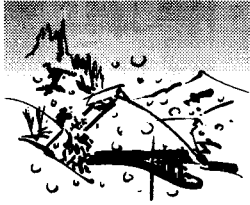
から企業経営者達もつと切実に危機感を感じ、生き残りを賭けて合併を行っているのだと思います。でも歴史の教えてくれるところによれば変化の激しい時代において、規模はメリットにはならないのではないのでしょうか。その理由は、現在の状況が第二次世界大戦前の大艦巨砲主義の時代状況と似ていると言ふことです。

太平洋戦争は、主に日本海軍とアメリカ太平洋艦隊の間で戦われた海戦です。当時の艦隊決戦思想は、大艦巨砲主義と呼ばれるもので、相手の艦隊より大きな主砲を持つ艦隊を建造して、その主砲の威力で相手を打ち負かそうというものです。そうした大艦巨砲主義の象徴が日本海軍の建造した巨艦・大和です。大和が46センチ砲を主砲とした理由はよく知られているように、46センチ砲を搭載した戦艦は、パナマ運河を航行できないためです。当時のアメリカの工業地帯は大西洋に面した東部海岸にあり、戦艦はそこで建造されていました。そのため、パナマ運河を航行できない船は、簡単には太平洋に出てこれないわけです。これを利用して艦隊の規模で劣勢にあつた日本は、46センチ砲を搭載した戦艦を建造し、個艦優位の原理を利用してアメリカ太平洋艦隊に勝とう

としたのです。

大艦巨砲主義に対する艦隊決戦思想として、当時、生まれつつあった思想が航空主兵主義です。これは、当時、新兵器として登場してきた航空機を艦隊決戦に使う思想です。最初の提唱者は、小沢治三郎という日本海軍の将官です。ただ当時は、大艦巨砲主義の全盛時代であり、あまり注目を浴びませんでした。しかし同じく航空機を艦隊攻撃に使う思想に注目をしていた人物が、山本五十六であり、山本は真珠湾攻撃に際して空母中心の艦隊を編成し、航空機を中心とした攻撃実施しました。これが、世界の注目を浴び、世界の海軍は空母を中心とした機動部隊による航空主兵主義をとるようになりまゝす。真珠湾攻撃の大戦果にも拘わらず、空母を戦艦の護衛としてみる見方から抜け出せなかつたのが、他ならぬ日本海軍であつたことは歴史の皮肉でしょうか。

その後の戦史を見ると、太平洋戦争で大和がなすことがなかつたように、航空主兵主義の優位が明らかです。なぜ、巨大な戦艦が小さな航空機に敗れたのでしょうか。それは航空機の機動性と機能性に敗れたと言えます。戦艦は遠方の戦艦にその巨砲で打撃を与えるために建造された



ものであり、近接する航空機のような小さな目標にはあまり有効ではないことです。また、戦艦は巨大であるが故に、安定して沈みにくいのですが、その安定性、ゆえに機動性が鈍く、航空機による戦術の大きな変化に対応しきれなかったのです。このように兵器の進歩が激しく戦術の変化が大きい時代には、巨大化の生み出す安定性より、戦術の変化に迅速に対応できる機動性が重要だったのです。

今まで述べてきた巨大戦艦の辿った運命が、現代の企業合併の運命を象徴しているのではないかと思っています。つまり、変化の激しい時代に巨大化することはメリットではなく、デメリットの方が大きいのではないのでしょうか。つまり巨大戦艦と同じく変化への対応が遅くなり、企業間競争でも遅れをとる場合があるのではないのでしょうか。大型の企業合併を尻目に、逆の道を取っている会社があります。それはフランスのルノーという自動車メーカーの軍門に下った形になっている日産です。

ルノーから来たカルロス・ゴーンという経営者が絞り込と集中の経営戦略をとっています。世間では、その戦略は批判を浴びていますが、でも変化の激しい時代には選択と集中

によって、変化に機動性を持つて対応することが重要であることは歴史の教える事実だと思っています。このように考えてくると、合併で巨大化する銀行・企業と選択と集中の戦略をとる日産、どちらの選択を歴史は支持するのでしょうか。ここまで述べてきたように、私自身は、歴史が支持するのは後者だと思っています。私の判断が正しいかどうかは、ここ

二、三年で歴史が答えてくれるでしょう。過去の歴史が教えてくれるものから現代史を考えて見る。これも、また、歴史の楽しみ方ではないでしょうか。

これから発展する企業は、航空主兵主義の中心であった空母のように機動性のある航空機のような小型の実戦部隊を多数保有して、時代の変化に素早く対応できる会社か、若くは、もう一つ海軍のアナロジーでいえばイージス艦のイメージ、即ち小型艦ではあるが情報武装の進んだ会社だろうと思っています。こしはらくは、私の歴史認識がどの程度正しいかを試す試金石として、興味を持って企業間の競争をみて行きたいと思っています。

創立二〇周年に向けて

会長 田口義之

この会が始って、早いもので来年で二十年になる。あつという間にここまで来たような気もするし、長かったようでもある。

二十年は、一つの歴史である。私自身、今思い出しても、発会当時の様子は、頭の中に霧がかかったようによく思い出せない。これがすなわち「歴史」である証拠である。

二十年に及ぶ会の歩みの中で、それぞれの節目ではそれなりの記念事業を実施してきた。

創立十周年では、吉野ヶ里遺跡を発掘した高島忠平さんをお招きして記念講演会を催した。これは県立歴史博物館と共催という形で同館の講堂を使わせてもらったが、これが先例となつて現在でも毎年一回同博物館と共催で歴史の講演会を催している。この時には、それまで発刊した会報「備陽史探訪」の復刻版を刊行して記念誌とした。

また、創立十五周年では、当会の山城好きのメンバーが総力を結集して福山周辺の中世山城跡を踏破し、その調査研究報告を「山城探訪」として世に問い、戦国期山城の研究者として売

り出しの中の中井さんをお招きして大講演会を催したのは記憶に新しいところである。

その他我々の会は折に触れて記念事業を行ってきた。平成五年には当会の恒例の行事となっている「親と子の古墳めぐり」の十回目を記念して、古墳めぐりのハンドブック「古墳探訪」の刊行。広島文化賞(平成六年)、福山文化賞(平成七年)の受賞に際しての記念祝賀会などである。それぞれ会員の皆様の中には懐かしく思い出される方もあると思う。そして、来年はいよいよ「二十周年」である。この記念すべき年に向けて、役員一同、半年以上前から慎重な検討を重ねてきた。

その結果決定した事項が平成二二年度の総会で皆さんにご討議頂く、記念行事と記念出版である。特に、創立二十周年記念出版「ふるさと探訪」の刊行は、我々が総力を挙げて取り組む課題である。内容は当会の活動にふさわしく、福山周辺の史跡めぐりのコースを、地域別、時代別に紹介する予定である。

我々は、会の歩みの中で、それぞれの節目で確実に「足跡」を残してきた。どうか、今回も大きな足跡を残せるよう、皆様のご協力を切に要望する次第である。

(総会の案内は一七ページに掲載)

蹉跎^{さた}

熊谷操子

枚方市の蹉跎公民館から発刊された館報を一度だけ読んだことがある。それは十年以上も前のことで、内容は殆ど覚えてはいないが、只一つおぼろげながら頭の隅っこに残っているのは、菅原道真が左遷された時の記事である。

それは太宰府に行く途中で頼光寺（聖徳太子建立）へ立ち寄り休憩後すぐ難波へ発った話で、その碑でも残っているのだろうぐらいに私は思っている。

どうしてもその跡地へ佇んでみたい気がして、思い立って十月中旬ひとりで列車の人となった。

枚方公園で菊の芸術をちよつと観て、その駅から京阪電車の光善寺駅までテクテク歩き、駅近くにある蹉跎公民館に立ち寄った。件の場所を詳しく聞きたかったからである。

係の人は、始め胡散臭そうな態度であったが、広島県の山間部からわざわざ来たのだと言うと、急に態度が変わって親切に教えてくれた。

そこには道真を祭る蹉跎神社が建っていて、境内の一角に頼光寺跡の碑があると言い、神社へ行く前に、蹉跎の歴史には特に詳しい歴史家の

木村俱子先生に是非会って行つて欲しいと言う。ご在宅を確かめてくれた後、お宅までの道を迷わないようにと、住宅地図をコピーして赤鉛筆で矢印を入れながら、七、八分で行けますからと丁寧に教えてくれた。

初対面の先生に会うのだという小さなおのきを感じながらも、私の足は何となく弾んでいた。

蓮如上人墓、東へ二丁とある石碑の東のグラダラ坂を上つてゆくと、別荘地帯と思われる一角にお宅があった。先生はずつと表で待つていて下さつたらしく、

「あんまり遅いので、迷子になられたのではと案じて居りました」

「地図を四枚もコピーしてそれを繋ぎ合わせて、こちらまでの道を丁寧に教えて下さつたので」

と、十五分の遅刻を詫びた。

「さあ、さあ」

と、言われるまゝに玄関に入りかけ、先ずその立派なお宅に驚き、広いお庭の見える応接室のソファの落ち込みに驚き、さりげなく小声で注文して下さった料理に驚いた。驚きながらも、まるで十年の知己のように、すすめられるまゝに厚かましくお昼を頂戴した。箸を動かしながらまた時には休めながら、先生のお話を興味深く聞き入っていた。内容は、

頼光寺へお参りした道真は、すぐ難波へ発った。娘の刈屋姫が父の左遷を知ったのは旅立つた後だったので、父を慕い、別れをしたく思つて急いであとを追つて来たが、道真はもう頼光寺を発つた後だったので、この丘の上で蹉跎（不遇で志を得ぬさま）して地団駄踏んで嘆き悲しんだという。それ以後、この一帯を蹉跎山といい、この広い地域を蹉跎村と名付け、それが今に残っている。語源の大切な場所である。と、

蹉跎地区の由来を説明された後、「この蹉跎神社は、道真のたたり後三番目に建立された立派な神社であるのに、土地の人にさえあまり知られていないのが口惜しいのです」と、本当に口惜しうだった。

この話の後、古代史、中世史、近代史と幅広くどんどん飛躍して二人はしばし刻を忘れていた。突然、先生は思い出したように、

「ちよつと見てくれませんか」

と、百人一首制作中の大きい和室二つを案内して下さった。私は又々驚かされたのである。白地の札から何組かの百人一首。絵を描き文字を入れての大仕事の真最中である。乾かして居られる一群の中に、菅家、貞信公の札があったのは偶然とも思

えぬ偶然で、七十三才と八十一才の女の無言の笑顔がそこでかち合った。二時間余り先生と楽しい時間を過ごし、書かれた本二冊と、素晴らしいパワーと、

「次回は是非泊まりがけで来て下さいよ。夜通し語り合ひましょう」との嬉しい言葉まで頂き、最高の出会いをかみしめつゝ、帰途に着いた。

余談になるが、道真の長女である刈屋姫は、宇多天皇の皇子である齊世親王（醍醐天皇の腹違いの弟）に嫁いでいる。道真の破格の出世を常々妬んでいた藤原時平と藤原菅根は、「醍醐天皇を追い落としして齊世親王を天皇に推そうと企んでいる」と、道真が考えてもいない事を捏造したのである。そのごん言を醍醐天皇は見抜けなかったのだろうか。即刻道真流罪という運びになったのである。

ちなみに、京都の北野天神と、覚寿尼ゆかりの藤井寺市の道明寺天満宮は九四七年に、太宰府天満宮と大阪の天満天神は九四九年に建立されている。木村先生の力説される蹉跎神社はその二年後、九五一年の建立。その後は、日本全国まるで雨後の筍のように、学問の神様としてどんどん祭られるようになったのである。

楽しいきは我が芸歴

後藤 匡 史

平成十一年七月二十四日、広島市八丁堀ホテル・シャンテにて娘の結婚式があり、披露宴にてカラオケで北島三郎の北の漁場を唄った。

また、十月三十日、大津野小学校四年生の大門町史跡巡りの講師を担当した。友人のお嬢さんが四年生で、奥方が婦人部の役員をしている関係から大門歴史会に依頼があった。

その夜、福山の街に出かけ、スタンド・バーにてカラオケで唄った。点数が出るということで結婚式で唄った北島三郎の北の漁場、これが何と八十九点この日の最高点だった。それから鳥羽一郎の男の港が八十六点、石川さゆりの津軽海峡冬景色が八十四点。小林旭のさすらい八十二点、この歌は昭和四十六年、洋酒喫茶リオ・コンパで五人勝ち抜き歌合戦で二人抜いて三人目で敗れた。もし、あの時、北の漁場や、男の港があったら五人勝ち抜いていたかも知れないと当時を懐かしく思った。それでは私の歌謡史をあげてみる。

昭和二十八年〓小学校五年生、森永製菓三ツの歌、ニッ唄い二十円のキャラメル二個、当時二十円のキャラメルは高価、一般庶民はカバヤ、グリコの十円キャラメル、講堂にて。

昭和三十六年〓海の記念日、素人のど自慢大会・予選、橋幸夫の喧嘩富士・二次予選、同、伊太郎旅唄、賞、日本タオル、浜の市神社境内。

昭和三十六年〓高原児ロケ、小林旭の集い。さすらいを唄い、参加賞日本タオル、教育会館三階ホール。

昭和四十三年六月八日〓別府杉乃井ホテル・パレス芸能大会、橋幸夫、佐久の鯉太郎、感謝状、茶ガシ、博物館招待券。

昭和四十四年五月八日、福山へ。

昭和四十六年六月九日〓洋酒喫茶リオ・コンパ、素人のど自慢大会五人勝ち抜き歌合戦、二人勝ち抜き賞金千円。参加賞バスタオル。

昭和四十六年十月二十二日〓藤純子の集い、緋牡丹博徒沖繩ロケ帰り、緋牡丹博徒唄い、彼女と握手。

彼女評：この歌むつかしいんですよ、私もレコーディングの時よく間違えたけど、あの貴男、間違えなかった。天下の美女にあの貴男と言われた時、ワシヤ泣くにも笑えなかった。

昭和四十六年一月二月〓小林旭のさすらい、参加賞バスタオル、ゲスト歌手美空ひばりのソックリさん。

昭和四十七年一月〓相撲甚句、花ずくし、ゲスト歌手、柏深雪、参加

賞トランプ。

昭和四十九年〓納涼歌合戦、二宮ゆき子の温泉小唄、ものまね(カエル、ニワトリ、赤ちゃん)、参加賞ノート、石けん、促進住宅にて。

昭和五十年七月二十六日〓納涼歌合戦、渡哲也くちなしの花、石原裕次郎栄光の背番号3、参加賞、たわし三点セット、石けん、促進住宅にて。

昭和五十一年七月二十二日〓第一回福山共同機工、芸能発表会、市民会館小ホール、相撲甚句花ずくし、参加賞、三菱シャープペン、ガラス製灰皿、バスタオル。

昭和五十一年十一月三十日〓第二回福山共同機工、芸能発表会、市民会館小ホール、かくし芸、枯ススキ、参加賞タオルケット。

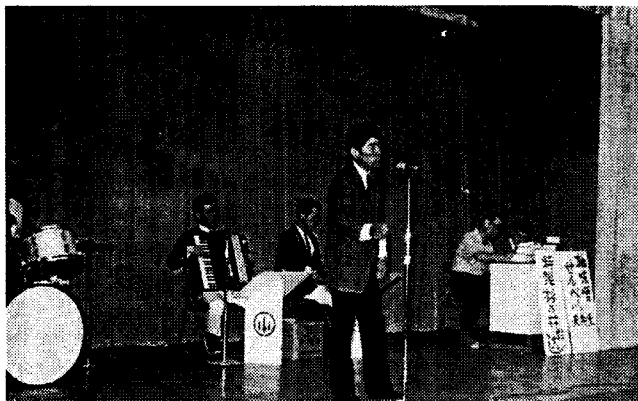
昭和五十二年八月〓納涼歌合戦、小林旭さすらい、準優勝、洗剤(大)促進住宅にて。

昭和五十三年七月二十日〓第四回福山共同機工、芸能発表会、市民会館小ホール、ものまね(カエル、にわとり)、タップダンス、ジャバニーズジスコNo.1、参加賞バスタオル。

昭和五十四年八月四日〓別府杉乃井ホテル、パレス芸能大会、小林旭昔の名前で出ています。感謝状、博物館招待券。この日、女房の両親と

私の誕生日。握手した歌手、森山かよ子、由美かおる、マルシヤ、鳥羽一郎、金田たつえ、藤純子(富司純子)。

写真/昭和四十三年六月八日
別府杉乃井ホテル パレス芸能大会
にて「佐久の鯉太郎」



尾ノ上古墳

4世紀豪族の墓の可能性

福山市教委 歴史的意義を説明



土砂採掘作業のため、埋蔵文化財の調査開始前に半分近くが取り壊されていた福山市加茂町粟根の前方後円墳「尾ノ上古墳」(推定全長約六十メートル)について、調査に当たった市教委職員による講演会がこのほど、緑町のサンピア福山であった。

歴史研究グループ「備陽史探訪の会」(田口義之会長、約三百人)が主催し、メンバーなど約五十人が参加した。

「尾ノ上古墳」の副葬品や歴史的意義を説明する
戸田指導主事



市教委文化課の戸田和吉指導主事が、調査開始時の古墳の状態や発掘作業の経過、副葬品の壺(つぼ)や埴輪(はにわ)、鏡などをスライドで示しながら、歴史的意義や価値などを説明した。中には、日本での出土例が二十面しかない

く、県内では初めての「雙鳳鏡(きょうほうきょう)」(直径二十二センチ)もあった。

戸田指導主事は「古墳の規模や副葬品などから、四世紀ごろ、備後地方のかなり有力な豪族の墓の可能性がある」と述べた。

講演後、田口会長は「貴重な古墳だったことがあらためて分かり、十分な調査ができなかったのは残念。市民ぐるみで文化財を守る機運を高め、再発防止したい」と話していた。

中国新聞福山版

1999年12月15日

小説と映画

ふくろう

種本実

当会に今一つ、会員相互のふれあいを目的に、共通のテーマをもとに話し合う場を設けては、との思いから、過日の役員会で新たに定例の読

書会を提案し、承認された。

第一回目は九月六日に開催された。以後は課題図書予約購入などを考慮し、隔月の開催となった。十一月の課題図書は「梟の城」であった。

「梟の城」は読書会の座長である私の独断で決めたのだが、特に深いわけがあったのではなく、書店で目

を通して面白そうだった、というだけのことである。さらにつけ足せば、司馬遼太郎の作品であることから、読んだ人は多いのではないだろうかとの思いもあった。

五百頁余りの文庫本だが、私は購入した夜から毎夜一週間ぐらいで読んだ。私にしては最近これほど熱中

して読んだ本はない。初回の課題図書、「風流武辺」(津本陽・著)も私が選んだのだが、読書会までにやっ和二回読んだに過ぎない。戦国武将であり、また茶道や、広島縮景園など造園にも秀でた上田宗箇の生涯を描いたこの本は、会員諸氏にも読まれていて、読書会は談論風発となることを期待したのだが、十一人の出席者でまずまずの感であった。

歴史研究会の読書会であるからには、歴史小説を読むことは言うまでもないし、実在した人物を描いた作品にとの思いもあった。「梟の城」は忍者小説であり、主人公は架空の人物である。しかし、直木賞受賞作品だけあって、とにかく面白い小説である。

秀吉の暗殺を己の生きざまとする主人公の忍者・葛籠重蔵、彼を捕らえて忍者から武士への欲望を達成せんとする同族の伊賀者・五平。彼らを取り巻く女や堺の豪商・今井宗及や京都奉行・前田玄以、更に石田三成など実在した人物群との絡み。

家康の勢力が次第に秀吉に肉薄しつつあった、当時の時代背景にまつわる、司馬遼太郎ならではの、ストーリーの中に史実を丹念に綴った分かり易い解説がいい。物語を作り話とは思えないほどの緊迫感を与えてく

れるのである。

「忍者」の生まれた背景、上忍・下忍という階級、甲賀者と伊賀者の違い。合理主義者信長によって壊滅された伊賀者の悲話。信長から秀吉、そして家康へと権力の推移に巧みに乗ずる前田玄以や、同様の今井宗及の生き方、時の大泥棒・石川五右衛門はなんと伊賀の忍者五平だったの言い伝えなど、秀吉政権の陰りがこたます中、激動する時代の流れに忠実に描かれた作品は、単に娯楽小説というだけでない。限られた人物像、時代背景ではあるが、この時代を知ることができる小説として価値ある図書である。

家康の秀吉暗殺の陰謀を暴こうとする石田三成、その配下の女甲賀者・小萩と、主人公・重蔵とのおりのサスペンスと共に、この小説の大きな柱となっていて、読者を魅了するのである。男性読者なら、誰もが自分の描く小萩像を胸にして頁をめくるのではないだろうか。司馬遼太郎は恋愛小説も書ける素養が十分ある、と思いつつ読んだことである。昭和三十四年に刊行された「梟の城」が今頃になって映画化されるとは驚いた。読書会に参加された十人の内、二人が映画を鑑賞されていた。

あらかじめ読んだ原作ほどの面白さはなかったと言われたが、むべなるかなの思いがはしった。

あの流行作家・渡辺淳一氏も「劇画化は自分が生んだ子を養子に出すという感じに近く、その子の因子は自分のものだが、預けられた先の育て方によって性格から考え方、行動パターンなど変わってしまう。それくらい小説と映像は違う。基本的にジャンルが違う」と述べている。

原作を読んで自分の脳裏にイメージ化されたものと、小説を脚本化した映像化されたものを比較すること自体無理な話だろう。

読書会の後、私も映画鑑賞をしたがやはり失望した。まず主人公・重蔵に中井貴一はミスキヤストだと思った。現代の好青年が単に忍者の格好をしているだけとしか見えないのである。小柄で伏し目、声は低く泥臭く無表情というのが私の忍者像だが、中井貴一は全く正反対の役者である。ただ、コンピュータグラフィックなるものを駆使したと聞いたが、文禄の役に備え築城した名護屋城の壮大な映像や、中井貴一が伏見城の屋根を駆け巡るシーンはリアルに富んでいてよかった。

原作で最も分かりにくい場面だが、せっかく重蔵が秀吉の寝所まで忍び

ながら、秀吉と会話して揚句の果てに暗殺を撤回してしまうというシーンはもっと短くすべきだった。

石川五右衛門が実は忍者だったという説は、伊賀国一ノ宮取国神社の社家の口碑として古くから伝わっている」と作者はその根拠を述べている。この説は、早乙女寅氏も「忍法秘巻」で述べているし、他でも読んだことがある説だから、信憑性はありそうだ。

歴史の歯車の中で、忍者の働きは定かではない。所詮闇の中に生きた者達のことであるからして。伊賀の服部半蔵は徳川家康に取り立てられたが、これは稀な例である。謀略にたけた、毛利元就もまた事ある毎に忍びを遣った。例えば、尼子氏の内紛、新宮党の崩壊も、元就が間者を遣って仕掛けた策略にはまった尼子晴久の愚行であった。

当時の戦国武将にとって、伊賀・甲賀の忍びは諜報・謀略のプロとしてそれなりの報酬と引替えに利用した集団だった。だから、「梟の城」の重蔵のごとく、自己の怨念だけに生きた忍者など実際にはいなかったと思われる。

日曜日の午後、劇場の二百余りの席は八割方埋まっていたが、一緒に鑑賞した他の人々の感想はいかば

かりだったろうか。久々に映画を鑑賞したが、この先感銘を受ける大作に出会う機会があるだろうかと思っている。

次回、二月の読書会は「吉川元春」(浜野卓也著・PHP文庫)と決まった。早速購入して読んでみよう。元春のファンの方々とこの本を手に入り合える日を楽しみに。

会報九三号の

原稿募集

原稿締切り

一月十五日(土)

到着分まで(厳守)

編集時間の都合で掲載できない場合がありますので、お早めにお送り下さい。原稿は一号につき、一人一本に限り(厳守)。

本文「一行一六文字×二二〇行」でちょうど一ページです。以下三一行毎に一ページの一段になります。四〇〇字詰め原稿用紙を使用する場合は、下四文字分を空白にして書いて下さい。

今回は予算の都合上、一ページ半以内でお願いします(依頼原稿を除く)。皆さんの会報です。身近な話題でもかまいません。どしどしお寄せ下さい。

丹生川上神社について

平田 恵彦

つい先日、郷里（奈良県吉野郡川上村）の姉から、丹生川上神社が発掘されたので資料を送ってあげる、との電話があった。神社の下流に大滝ダムが間もなく完成し、社地が水没するため調査されたのである。ただ、すでに新しい社殿が南方五〇m、標高四二・一mの所に完成し遷座している、正確に言えば、旧社地の発掘ということになる。

この神社は「延喜式」神名帳に「丹生川上神社 名神大 月次新嘗（頭に註に号雨師社）」とある神社のことで、平安時代には二十二社（朝廷が祈年・祈雨・止雨のために奉幣した神社で、当時最高の社格を有した）にも選ばれた古社である。とくに祈雨・止雨においては、京都の貴布禰神社とともに靈験あらたかとされ、朝野の篤い信仰を集めた。

文献上の初見は「続日本紀」の天平宝字七年（七六三）の条で、「五月庚午（二八日）、丹生河上の神に幣帛のほかどくに黒毛の馬を奉る」とある。さらに宝龜八年（七七七）五月一三日と八月八日の条には「白馬を丹生河上の神に奉る。長雨のためである」とある。黒馬の奉納は祈雨、

白馬は止雨の祈願で、当初は本物の馬を献納していたのが、後には絵馬へと変わっていくのは周知の通りである。以後室町時代まで、朝廷からの奉幣の記録は五十余件にものほつている。

一方、「類聚三代格」所載の寛平七年（八九五）の太政官符によれば、天武天皇の御代の創建といい「人声の聞こえざる深山、吉野の丹生川上に吾が宮柱を立てて敬祀せば、天下のために甘雨を降らし霖雨を止めむ」との神誨があったことによるという。神階については、嵯峨天皇の弘仁九年（八一八）四月に従五位下を授けられ、宇多天皇の寛平九年（八九七）一二月には従二位まで昇叙した。

また、後醍醐天皇が吉野行宮にあつたとき、この神社に寄せて

「この里は丹生の川上ほど近し

祈らば晴れよ五月雨の空」

と詠んだのはよく知られている。

ところが、これほど著名な神社であるにもかかわらず、比定地は三カ所あつて決着がついていない。室町中期までは朝廷からの奉幣が続いたものの、おそらく戦国期に入つて途絶えたため衰退し、一時祭祀が絶えたために、その所在がわからなくなつてしまつたのだらう。

現在丹生川上神社に比定されている三社は、川上村迫に所在する「上社」、東吉野村小の「中社」、下市町長谷にある「下社」で、姉が発掘調査されたと教えてくれたのは、川上村の「上社」のことである。

三社のうち本来の丹生川上神社として江戸時代から有力視されているのは「下社」である。白井宗因が「下市之傍山中丹生村」にあると主張して以来、「大和志」「神名帳考証」などがこの説を採っている。

祭神は闇彥神。クラは「谷」を表し、

オカミは「蛇神」「龍神」を意味する。つまり「谷間にいる龍神」の意で、いうまでもなく水神である。社殿は吉野川の支流、丹生川と長谷川の合流点に建つ。「丹生」は多くの場合、古代に水銀朱・辰砂が採れたことを示す地名で、丹生川・長谷川流域に「丹生」を冠する神社はこれ以外にも、下市町栃本の丹生神社、五條市丹原の丹生川神社等がある。こうしたことから社名の「丹生川上」にふさわしいと支持する学説が多いのだらう。ただし、注意しなければならぬのは、丹生神社の祭神は一般に「丹生都比売」であることが多く、これは文字通り「丹生（水銀朱）の女神」という意味であつて、丹生川上神社の本来の祭神（水神）と直

接的には結びつかないということである。

「下社」から丹生川を少し下ると南朝の行宮のあつた賀名生（穴生）である。このあたりに南朝の史跡が多い。和田には堀家住宅があつて、天誅組の吉村寅太郎の揮毫による「皇居」の扁額が掲げられている。

この家の背後の丘陵が南朝三代（後村上・長慶・後龜山）の皇居、黒木御所伝承地なのである。また、近くに伝北畠親房墓（五輪塔）もある。

さて、七千坪もの広大な境内と十町歩の社有林を有し、社殿が最も立派なのが東吉野村の「中社」である。「雨師社」の号にあさわしく、小牟漏岳の山麓、吉野川支流の高見川（木津川）・目裏川・四郷川（三尾川）の三河川の合流地点に鎮座する。近接して東吉野キャンプ場があり、周辺は春から秋にかけておりおりの草花が咲き乱れる景勝の地で、中でもツルマンリヨウは県の天然記念物に指定されている。

「中社」はかつて「蟻通明神」と称された。「蟻の熊野詣」と同様、蟻の行列のように多くの信者が列をなして参拝したことに由来。主祭神は罔象女神で、伊邪奈伎命・伊邪奈美命など十神を配祀する。罔象女神は「日本書紀」の第三の一書に「水神

「岡象女」とあるように雨を司る女神である。拝殿には多くの絵馬が奉納されており、電力会社のものが目立つ。当然のことながらやはり面白い。

他方、「上社」は吉野川上流の左岸に鎮座する。主祭神は高禰神でやはり水神である。配神は大山祇神・大雷神の二神。これは『日本書紀』第七の一書所載の、伊弉諾尊が火神の軻遇突智を三段に斬ったさい、一段は雷神、もう一段は大山祇神、さらに一段は高禰となった、という神話に基づくものと思う。

「上社」はかつて三社のうちで社地と社殿が一番小さかった。過去形にしたのは昨年遷座してとても立派になったからである。俗な話だが、ダム建設による移転に際し、多額の補償金が入ったに違いない。

発掘された旧社地は吉野川の河岸段丘上にあり、小さいながらも杉・桧・櫟の社叢があった。神木とされるのは四本の杉と二本の櫟で、樹齢四百年以上という。この「二本の櫟」というところが興味深い。というのは、用明天皇（聖徳太子の父帝）の皇居を「池辺及槻宮」といい、これは宮の御門の両脇に二つの槻（櫟の古名）が植えられていたことによる命名である。実は槻も杉や楠と同様に神が宿るとされる聖樹で、双槻宮は

その伝統を受け継ぐものだ。「上社」の二本の櫟の神木は、まさにそのことを証明しているのである。

六年前訪ねたときに神職から聞いた話によると、神宮皇学館大学が境内の一部を発掘したところ縄文時代のサヌカイトの石器が出土し、しかもこれが香川県産ということだった。つまりこの地に住んでいた縄文人は、吉野川の急流を下って瀬戸内海を渡り、遠く四国まで足をのばしていたことになる。

ダムの底に沈んでしまふのだから今回の全面発掘だろう。調査担当は橿原考古学研究所で、一〇月三〇日に住民対象の中間説明会が開催されたそうだ。姉が送ってくれたのは当日配られた簡単な資料と写真なので詳しいことまではわからない。これによると、平安時代の宮座の遺構と北宋銭（一番古いものは祥符通宝「一〇〇九年発行」等の遺物が出土している。姉は三社のうちで一番古いことが証明されたと喜んでいて、これは手前味噌というもので、今後の研究を待つべきだろう。

ただ、歴史的な背景を考えると、姉が喜んだ理由がわからなくもない。先にも触れたが、いままでも「上社」はずっと分が悪かったのである。実のところ、明治のはじめ丹生川

上神社と認められ、最初に官幣大社となったのは「下社」だった。しかし、同社の神職であった江藤正澄が古文書を研究し、社地の範囲が記録にある「東限は塩匂、西限は板波滝、南限は大山峯、北限は猪鼻滝」に合わないことを発見。自社を「口の宮」とし、新たに川上村迫にある神社を「奥の宮」として社内社に比定した。これを受けて明治二十九年（一八九六）内務大臣告示があり「口の宮」を「下社」、「奥の宮」を「上社」とし、同時に官幣大社とした。

ところが大正四年（一九一五）に蟻通神社神官の森口奈良吉が「丹生川上神社考」を発表し、同社の岡象女神像が平安初期のものであることや「丹生社」の名を刻んだ弘長三年（一二六三）銘の石灯籠があることのほか、数点の古文書を実証としてあげ、自社こそ丹生川上神社である、と訴えた。その後、内務省の調査によってこの主張が認められ、大正十一年（一九二二）丹生川上神社中社として官幣大社に列しただけでなく、三社を合一し「中社」に社務所が置かれることになったのである。

以上のような経緯があつて「上社」は比較的影響が薄かったのだが、今回の発見によって考古学的には「上社」が最古である可能性が出てきた。もちろん、平安時代の宮座の遺構や遺物が出たからといって、その時代からこの神社が存在していたことを示してはいいても、それがそのまま丹生川上神社であったことの証明にはならない。

しかしまあ、なにぶん生まれ故郷の神社のことなので、僕もいくぶん誇らしい気分にはなっている。発掘調査は完全には終わっていないようなので、今後どのような発見があるか楽しみである。

『古事記』を読む

「実施要項」

〈開催日〉一月八日（土）

〈時間〉午後二時～四時

〈会場〉福山市中央公民館会議室

〈座長〉平田恵彦さん（事務局長）

〈会費〉実費（一〇〇円程度）

『備後古城記』を読む

「実施要項」

〈開催日〉一月五日（土）

〈時間〉午後二時～四時

〈会場〉福山市中央公民館会議室

〈座長〉出内博都さん（部会長）

〈会費〉実費（一〇〇円程度）

独白二題

門田幸男

I 僣越ながら、他人様より御先祖様の墓の方がずっと大切だと思ふ話

探訪の会の皆さんは歴史遺物として古墳を探訪される方が多い。私は少し違って、「なんで他人様の墓を」と思ってしまう。

私の家の御先祖に歴史に残るほどの業績を残した人はいない(?)と思うが、子孫の安泰を願う心は他の御先祖様とは段違いである。その証拠がある。

平成九年に私が大腸ポリープを切除した時、精密検査の結果、先端がガン化していた。しかし、早期治療だったので転位はないとの話だったが、追跡検査の末にリンパ節が肥大(転位)したとの診断で、平成一〇年七月一七日に国立福山病院に再入院し、そのリンパ節の切除手術を七月二十九日に受けた。

ところが、手術部分から浸み出る血液等の排出がうまくいかず、高熱と疼痛が止まらない。その解決のための手術をさらに二回受け、その上腹腔内を洗浄吸引するパイプの先端(固い)が当たって動脈破裂を二度も起こすなど散々な目にあった。

地獄の穴へベッドもろとも滑り落

ちる幻覚(眠っていない時に目とぶると見える異次元の世界)を見るなどまさに死の淵に立ったが、医師の尽力の結果、平成一〇年一〇月二三日、九十九日目にやっと退院することができた。

ここまでは以前会報に書いた話である。実はこのあと私は奇跡を体験をした。「奇跡的な体験」ではない。「奇跡」である。

入院中にお盆もお彼岸もきたが、妻も付き添ってくれていて家を留守にしていたので御先祖様もホッたらカシの有様だった。

退院後体調が回復したので、私の家の墓、家内の家の墓、そして母方の家(祭祀責任者不在のため私が守っている)の墓に最後に参った。いつものように草をむしり水をかけタオルで清めていたとき、一瞬、ずっと前(昭和二十二年)に亡くなった祖母が姿を見せたのである。

ふつう幽霊というものは、殺されたりしてこの世に怨念を残して死んだ人(お岩さんなど)が姿を見せると聞いていた。

しかし、亡くなって五十年も過ぎてアノ世で穏やかに過していたに違いない祖母が昼間姿を現すには、よほどの想い(墓を守っている可愛い孫が、予期せぬ病状の悪化で死にか

けたことを想いわずらっていたのに、神仏の加護を受けて何とか死神の手から逃れることができた喜びの感情があつて、私にそれを伝えたかったに違いないと思う。

だが、亡くなった私の父や母は姿を見せることはなかった。このことから考えられるのは、父母に愛情が欠けていたのではなく、法華の強い信者であつた祖母に父母にはない霊力があつて、そのために姿を現すという奇跡をおこせたのではないかということである。

別に会員の皆さんに自慢しようとか教訓を述べようとかいうのではなく、ほんとうにあつた奇跡として、御先祖様が子孫のことを案じ続けていることは五十年の歳月よりもはるかに大きくて重い、という話をしたかっただけである。念のため。

Ⅱ お月見はなぜ旧八月酉の月か
「月々に月見る月は多けれど」

月見る月はこの月の月」という有名な歌があるが、なぜ旧暦の八月に月見をするか、という問いを発する人はあまりいない。

そこで、この場を借りてこの問いを発してみようと思う。なぜ、どうして、と考えることが進歩のはじまりと思うからである。

俗に「仲秋の名月」という。いま

ではその季節感が失われてしまったが、旧暦では七月・八月・九月が秋である。八月は秋のまん中の月、すなわち「仲秋」である。陰陽五行思想においては、庚辛の「金気」のまさかりの季である。

古代中国では、例外を除けば、金属は白い色をしていると考えられた。おいおい例外の方が多いぞ、と思うのは現代人の思考法である。とにかく、そういう理屈で金気の色は白、同時に金気の秋の色も白とされた。それで北原隆吉は詩人になったとき「白秋」と号したのである。

ちなみに春の色は青、「青春」はここからきた。「青春とは何だ」と聞かれたときにはちゃんと教えてあげよう。夏の色は赤だが、文字は「朱」を使うので「朱夏」。知らない人は「朱夏園」のラーメンを食べてはいかん。冬の色は黒。厳密にいうとやや赤みを帯びた黒で、その文字は「玄」。それで「玄冬」という。これはあまり人気がない。

ついでにいうと、季節と色は神様とも結びついた。青龍・朱雀・白虎・玄武のいわゆる四神獣である。それだけでなく方位とも結びついた。春夏秋冬はそのまま東西南北で、これまた麻雀でおなじみである。花牌にどんな絵が刻まれているかよく見

てみよう。

話が脱線してしまっただが、ここからは真面目に。旧暦八月酉の月がなぜ月見る月なのか。

秋は春と違って空気が澄んでいるから星空を見上げるには適している。月は太陽光を反射して明るく白く光っている。それで金気の色とされるのである。

さて「金気」とは何か。

例外的水銀を除き金属は堅い。堅いということは押しても形が壊れない。人間の体でみれば、壊れないことは健康長寿を表す。また金はすなわち「お金」でもある。金に不自由しないことは万人の望むところである。健康と金満（満月と重なる）とを願うには申し分のないとき、それが旧暦の八月十五日なのである。

「この世をばわが世とぞ思う」

望月の欠けたる事の無さを思えば」と藤原道長が歌ったように、欠けたところのない生活は万人の願うことなので、月見に供える団子も白くそして丸く作る。

また、花見につきもののススキも、大群落を作るほど生存力の強いことや、春になると宿根（親と同じ）から新芽を出して成長することなど、人間の生きざまになぞらえて選んでいるのだと思う。

豊饒の大地、播州平野の旅

塩出基久

備陽史探訪の会の年に一度の一泊

二日の旅行が、本年は播州平野の史跡を訪ねる事で計画された。コースの設定、立案の大半は、平田事務局長があたり、寺崎さんと小生がサブとしてお手伝いをさせてもらった。

現在の行政上の地名で表示すると、加西市、小野市、加東郡杜町、加古川市に残る史跡をめぐる旅である。

探訪箇所としては、寺社・山城・古墳を入れるべく計画したが、時間の制約、さらには参加者の歩行能力の可否を考え、「山城跡」は割愛せざるを得なかったのはいささか残念であった。

しかし、参加した皆様のご協力のお陰で事故もなく、また天候にも恵まれ、つつがなく行事が終了できたことは旅行委員として喜ばしい締めくくりとなった。厚くお礼を申し上げます。

参加の皆様はご存じのこととは思いますが、一応コース（探訪地）を紹介させていただくことにする。

（第一日）

一乗寺、小野市好古館、広渡廃寺跡、浄土寺、浄谷八幡神社、朝光寺

山伏峠石棺仏、玉丘古墳。
宿舎「いこいの村はりま」

（第二日）

北条の五百羅漢、北条住吉神社、酒見寺、神吉城跡、宮山遺跡・同古墳群、西条廃寺跡、行者塚古墳、日岡神社、比礼墓、日岡山展望台、加古川歴史民俗資料館、鶴林寺。

さて、偏った見方かもしれないが、探訪地の印象、感想の一端を述べさせていただきます。

第一は「国宝」「国の重文」「県の重文」が、探訪地の東播磨にかくも多く点在していることに驚かされたことである。

第二は寺院建造物の建築技術の水準の高さである。

とくに小生が感心させられた点は、シンプルな構造でありながら建物を周到な強度計算の下、巧みに構築していることである。

さらに感心させられたところは、「長く伸びた軒先」を、柱を入れないうで、その荷重をたくさん「畳股」などの「組物」を使って分散させ、それを装飾的にもみせている点で、その技術は見事である。

当然の帰結として「軒下の広い空間」の確保につながっているのは、当時の大工の棟梁の技術水準の高さを証明している。このような技術集団

の存在が今日の我々の目を楽しませてくれる。

昨今は材料強度の高い素材の出現で、工期面において昔では想像もできないスピードを手に入れ、高層建築を可能にし、巨大空間の建物を得た反面、味わいのある構造物が姿を消している。寂しい限りである。耐久性についても、木造建築にはかなわないのも事実である。

第三は「古墳」の存在である。

「古墳を築いて力を誇示」した一面は理解できるが、構築された古墳の数と人口、作業の全てを人力に頼った当時に思いを馳せた時、人々の集中力、忍耐力に敬意を払わずにはいられない。

「玉丘古墳」にまつわる「意美」「袁美」の二人の皇子と「根日女の命」をめぐる「悲恋の物語」の説話が残るなど、ロマン漂う物語にもうるおいを感じた。

最後に中村副会長の挨拶にもあつたが、この旅行の目的は、第一に「会員の親睦」、第二に「史跡の探訪と見学」、第三に「明日に向けての充電の場」は、単なる観光旅行との違いを明確に区別した名言だと聞かせてもらった。

来年の当会創立「二十周年記念」の旅に早くも夢は広がる。

古市古墳群と

周辺の史跡めぐりⅠ

坂井邦典

平成十一年九月四日、平田さんの案内で総勢八人の見学行である。午前四時に福山を出発し、七時五〇分、松原ICから下りた。するとすぐに最初の探訪地があった。

☆河内大塚山古墳

墳丘全長三三五m。全国五番目の巨大な前方後円墳で、池の中に浮かんでいる小山という感じである。南北朝時代に城として利用され、また大正一五年（一九二六）に陵墓参考地に指定されるまでは大塚村という集落があった。被葬者は阿保親王（平城天皇の第一皇子）説と雄略天皇説とがある。しかし、この古墳は五世紀後期の築造と考えられる。

☆大津神社

延喜式内小社で、現社殿は江戸末期の再建である。祭神は五世紀頃に百済からの渡来系の津氏の祖神塩君（牛定君）、素戔鳴尊他二神である。

☆野中寺（青龍山徳運院、真言宗）

「中の太子」と呼ばれ、聖徳太子または蘇我馬子の創健といわれる。渡来人の船氏の氏寺と考えられる。たびたびの火災で消失し、礎石が残るのみ。残存している心礎は大きな

支柱孔と舍利孔がある珍しい形である。現在の建物は江戸時代（寛文年間）の再建である。

▽ヒチンジョ池西古墳の石槨

野中寺の境内に移築展示してある。二上山でとれる凝灰岩を加工した、十枚の石材を組み合わせて造った横口式石槨または石棺式石室というもので、中には漆塗りの木棺が安置されていた。

▽お染久松の墓

同じく境内の墓地の一隅にある。宝永五年（一七〇九）大坂東堀の油屋太郎兵衛の一人娘お染と丁稚久松とが情死した実話を浄瑠璃や歌舞伎の題材としたので有名になった。二人を可愛相に思って墓を造ったのが大坂東堀天王寺屋権右衛門であった。

☆岡ミサンザイ古墳

（仲哀天皇恵我長野西陵）

墳丘全長二四二mの前方後円墳。

前方部の幅が広く、竈窯で焼かれた黒斑をもたない埴輪から、五世紀末ないし六世紀初頭の造営と考えられ、仲哀天皇の時代とは一致しない。それで雄略陵に比定する説がある。ミサンザイあるいはニサンザイというのはミササギ（陵）がなまってきた語といわれている。

☆アイセル・シュラホール

藤井寺市立生涯学習センターであ

る。外観にはびっくりした。船形埴輪を模した建物（三階建）で、アイセルは活動・情報・相談・交流・学習の英語の頭文字をとったもの。歴史展示室には倭の五王時代をテーマにして、主に古墳から出土したものを展示してある。津堂城山古墳から出土した一m大の水鳥埴輪三基の実物があつた。

☆辛国神社

延喜式内小社で、雄略天皇時代の創建と伝えるが、現社殿は昭和六二年に再建したもの。祭神は饒速日命・天兒屋根命・素戔鳴命で、「辛国」は韓国に由来し、五世紀の百済からの渡来人にかかわる社である。

この神社の横の駐車禁止の道路に車を止めて下車し、歩きはじめた途端、バイクに乗った警官が二名やってきた。早々にやられたと観念したところ、二人とも知らぬ顔をして通り過ぎたのでホッとした。後で神社の中に駐車場が見つかったので車を移し安堵した。

☆葛井寺（紫雲山三宝山剛淋寺、真言宗御室派）

奈良時代前期の百済系渡来人、葛井（白猪）氏の氏寺として七世紀に建立された。本尊の千手観音坐像は国宝で、手が一〇四二本もあり、天平時代の乾漆像である。毎月十八日

に開帳されるので見る事ができる。たびたびの兵火で焼けたが、豊臣・徳川両氏により再建された。

☆津堂城山古墳

墳丘全長二〇八m。もとは二重濠をめぐらしていたが、室町時代に小山城にされていたので原形は変容し、濠も埋められている。もとの周庭帯を含めると三三五m以上もある巨大な前方後円墳で、四世紀末から五世紀初めに築造された大王陵と思われる。古市古墳群中の最初に造られた古墳である。明治四五年（一九一二）、後円部の頂に堅穴式石室に覆われた巨大な長持形石棺が出土した。また内濠から大きな水鳥形埴輪が出土した。「まほらしるやま」という古墳の横にある資料館で説明のテープを聞いて墳丘に上り、埴輪の破片を拾った。後円部の一部が金網で囲まれており、ここが陵墓参考地になっている。

☆島泉丸山古墳

（雄略天皇丹比高鷲原陵）

直径七五mの円墳で周濠がある。六世紀中葉の築造と思われるので、五世紀の倭の五王最後の武に比定されている雄略天皇（ワカタケル大王）の陵墓としては合わない。また古墳時代盛期の大王墓が、前方後円墳を採用しないで円墳とは考えられない。

倭の五王とは宋に朝貢した讃・珍・濟・興・武のことで、応神・仁徳・履中・反正・允恭・安康・雄略の七人が候補にあがっている。諸記録によれば、讃と珍は兄弟、済と興は親子、興と武は兄弟である。

☆野中宮山（足塚）古墳

墳丘全長一五四mの前方後円墳で、濠の一部が埋め立てられて前方部は幼稚園と児童公園になっている。五世紀前半の築造で、出土した馬形埴輪は日本最古のものという。我々はローンで買った弁当をもって後円部上の野中神社で昼食をとった。

☆野中神社

貞観一七年（八七五）の創建と伝える。祭神は彦国葺命・素戔鳴命。現社殿は昭和二五年に建てられた。

☆狭山古墳

墳丘全長一〇三mの前方後円墳。五世紀中頃、菅田御廟山古墳と同じ頃に造られた。石棺が掘り出されたというが、所在不明である。

☆墓山古墳

羽曳野市役所の駐車場の隣接地にある。墳丘全長二二五mの前方後円墳で大王墓級である。応神天皇陵の陪冢として管理されているが、出土した埴輪から五世紀前半に築かれたもので、時期が違うといわれている。

☆青山第一号古墳

径六五mの大円墳で、五世紀中葉の築造である。「スナック青山」のところから眺めた。周濠の水が汚く、スナックから細い幅の板橋が墳丘に渡っており、古墳に入れるようになっていた。これを見て我々の衆議

は一致した。これは古墳の林の中でシイタケを栽培している。それを取って料理してスナックのツマミに出しているのに違いないと。酔ったお客は板橋より落ちるからシイタケを取りには行けない。

☆峰ヶ塚古墳

現在発掘調査中であり、終了したら公園にする予定らしく公衆トイレが設置してあった。我々は自由に墳丘上へ上がることができた。

墳丘全長九六mの前方後円墳で、二重濠をもつ大王墓級と思われるが、周濠は全部埋まっていた。江戸時代の絵図には日本武尊の白鳥陵として記載されている一方、允恭天皇の皇子木梨輕皇子の墓ともいわれている。後円部に堅穴式石室があり、石棺の破片（阿蘇溶結凝灰岩）多数と三千点に及ぶ副葬遺物が見つかった。五世紀末から六世紀初めの築造という。

☆ボケ山古墳

（仁賢天皇埴生坂本陵）

墳丘全長一二二mの前方後円墳で、新しい時期の六世紀前葉の築造であ

る。管理小屋が無人だったので前方部にある拝所の櫓の隙間から入って周濠の堤の一部を歩いてみた。

☆塚穴古墳

（用明天皇皇子来目皇子埴生岡上陵）

一辺の長さ四五mの上円下方墳で、七世紀前葉の築造と考えられる。来目皇子は聖徳太子の弟である。明治三一年（一八九八）まで横穴式石室が開口していたという。

☆白髪山古墳

（清寧天皇河内坂門原陵）

墳丘全長一一五mの前方後円墳で、前方部が後円部の二倍もあり、六世紀前葉の古墳である。ボケ山峰ヶ塚と共通の埴輪が出土しているもので、三つは同時代と考えられている。

☆輕里大塚古墳（前の山古墳、景行天皇皇子日本武尊白鳥陵）

墳丘全長一九〇mの前方後円墳で、埴輪の特徴から五世紀後葉の築造と考えられる。ヤマトタケルの白鳥陵に比定されているが、古墳築造の時期をはるかに遡り、しかも伝説上の人物の墓と断定する根拠は乏しい。

☆菅田八幡宮

祭神は応神天皇・神功皇后・仲哀天皇・住吉三神で、欽明天皇の時に菅田御廟山古墳の上に祠を祀ったのが始めとされる。平安時代の御冷泉

天皇の時に現在地の後円部南側の濠の外に移った。その後兵火により消失し、現社殿は豊臣秀頼の再建である。しかし、近世まで後円部の頂に社があったので、江戸時代の絵図には、その社に自由に参拝している人々が描かれている。

☆菅田御廟山古墳

（応神天皇惠我藻伏岡陵）

墳丘全長四二五mあり、全国二番目の巨大前方後円墳である。しかし、表面積や体積では大山古墳（仁徳陵）を上回り、全国一の大きさである。墳丘上に堅穴式石室や長持形石棺の一部が露出していたと伝えられている。この古墳に使用された埴輪の総数は二万本以上と推定されている。

応神天皇は仲哀天皇の第四皇子で、神功皇后を母として筑紫国で生まれ、皇后崩御の翌年正月に即位し、在位四一年、百十一歳で崩御したと伝えられている。

最近まで、菅田御廟山古墳は被葬者と陵墓名が一致し、四世紀ないし五世紀初頭に築造された前方後円墳としての古墳の編年研究の基準点とされてきた。しかし、『日本書紀』に記載のない応神天皇の存在性への疑問を含めて、被葬者を応神天皇と特定する根拠に乏しいこと、また、川

西宏幸氏の円筒埴輪の編年研究によつて本古墳の築造時期は五世紀中葉を遡らないことが指摘されている。

この古墳の拝所は前方部北側の内濠に接してあり、立派な警備管理室があつて職員が常勤していた。ここでは各地の天皇陵の印がつき放題で、一同は大喜びであつた。

☆菅田丸山古墳

応神陵の拝所に向かう参道の左脇に沿つた、うつそうとした森が本古墳である。一八四八年に優れた馬具を出した事で有名になつた。

☆大鳥塚(賀屋山) 古墳

菅田御廟山古墳のすぐ北に位置する墳丘全長一〇七mの前方後円墳である。四世紀末から五世紀初頭の築造で石室は堅穴式と考えられている。

陵墓や陵墓参考地では探し廻つてやつと拝所を見つけた。古墳の見学は池の外から森や山を見たのでは駄目で、拝所まで行き正面から堂々と見なければいけないのだと、同行の三好さんが頑張るから大変である。古市の古墳はどれも濠の周囲にびっしりと住宅が建つていて、拝所へ入る道がわからず、わかつても自動車狭くて入らず、行き止まりになつていたり駐車にも困る。運転を担当された平田さんと平川さんのご苦労に頭が下がった。

宿舎の「かんぱの宿 富田林」に着いたのは午後六時四〇分である。

九月バス例会 だれも知らない

くらしきに参加して

高橋 光子

電車の窓から、いつか行つてみたいと思つていた三重塔。

倉敷市西阿知の遍照院。元は笹沖にあり、海中の島で航海の難所。行き交う船が帆を下げて安全を祈つたので「帆下げの宮」ともいわれていました。隣の熊野神社も古くは十二社権現といわれていました。

そこからバスで十分、源平古戦場の藤戸寺に到着。源平将士供養のため建立された石造五重塔婆が境内の片隅に建っています。

「平家物語」の藤戸の段は有名です。

源氏の武将佐々木盛綱は海を馬で渡るため近在の若い漁師に浅瀬を聞きだし、目印に小竹を立てたあとと口封じのため刺殺。翌日、盛綱は海峡を渡つて先陣の功をとげました。

その母親が、佐々木憎けりや笹まで憎い、と笹をむしり取つたので今でも笹が生えないという笹無山、経ヶ島、浮洲岩の碑等、多くの史跡が残っています。

再びバスに乗つて児島方面へ。

廃寺となつた総願寺跡の宝塔。仏像を浮き彫りにしてある、日本で二番

目に古い立派なもの。気を付けていないと見過ごしてしまいそうな場所にひっそりと残っています。

今日のコースは、ここ十年くらい毎年春、飽きもしないで参加している「倉敷ツーデーマーチ」の三十キロ、二十キロコースとはほぼ同じ。

小豆の煮える香に誘われて、裏の歩行者道路から入った、藤戸饅頭屋。ビツの葉を素足に貼ると痛みが軽くなるといつて貼つていた人。

歩くと二時間以上はかかるだろう下津井城跡もバスでは二十分ほど。この城は近世の山城。一国一城令で取り壊され、近くの天城遍照院の庫裏や海禅寺本堂の欄間で再利用されたとい

います。でも本丸・西之丸・堀切・石垣等はよく残っています。

瀬戸大橋を左手に、目の前に下津井港に突出した浄山の祇園宮、その北側の下津井古城、フェリーがゆつくりと港に入つていくのを見ながら昼食を食べました。西廻りの北前船の積出港、金比羅さんの潮待ち港として栄えた町並みも今はひっそりと静まりかえっています。

三たびバスで連島に向かいます。鞆の沼名前神社から勧請された厄神社の境内に、薄田泣菫の詩「大和にあらましかば」と焼き付けられたれた備前焼陶板があります。

私は「故郷は、遠きにありて思うもの、よしやうらぶれて、異国の乞食となろうとも、帰る所にあるまじき」と歌つていた彼が、近くの生家、連島大江で亡くなつていたので意外でした。

すぐ西側といっても、歩くと十分くらいで飽取神社。古くは「海若宮」と呼ばれ、船乗りの崇敬を受け、立派な社殿があります。

厄神社の少し東に真言宗御室派準別格本山宝島寺があります。江戸時代二度の火災で規模が小さくなったようです。

江戸時代中頃の名僧、寂厳住職の寺として有名です。寂厳はサンスクリット語の研究を大成させた学僧で、能書家でもあります。

鎌倉時代の木造仏頭は非公開ですが、室町時代の仁王門は岡山県屈指の古い建築です。その頃は目の前に青い海が広がっていたんだらう、と思ひながら高台の墓所から臨海工業地帯の続く町を眺めました。

私が三十年前住んでいた土地、厄神社前にある亀島山。

戦時中、韓国から連れてこられ、住んでおられる人たちが、チマチヨゴリのオムニに連れて行つてもらつた潮干狩り、古い三菱の社宅群、公害で入退院を繰り返した頃が思い出させる一日でした。

神無月、

錦秋の吉備路を歩く会に参加して

平井和文

私にとって当日のハイライトは、
楯築墳丘墓との出会いであった。

それは倉敷市矢部「王墓の丘史跡公園」の西山山頂に所在する。そこには巨石が配置された空間がある。そこが墳丘墓遺跡だ。遺構を外した位置に楯築神社が祀られている。

眼下東側に足守川が蛇行して流れ、その対岸の山裾には吉備津神社が遠望できる。西と北側は吉備高原の山々。南方は我々が歩いてきた備中の平野である。もともと、現在は平野だが、縄文海進のころから、弥生・古墳時代を通じてこのあたりまで海が入りこんでいた。吉備の穴海といわれるところである。周囲には古墳などの遺跡・遺構が数多連なり、まさに古代吉備国中枢の地である。楯築墳丘墓はこのような贅沢な眺望をもつ地に築かれている。

我々探訪の会一行は無遠慮にもこの弥生時代の王者が眠る墓域の上に腰を下ろし弁当を食べた。さらに楯築神社の御開扉をお願いし、御神体である弧帯文石（亀石）を間近に拝

観させていただいた。私は神威を得たく、御神体をそっと触らせていただいた。御神体に封じ込められた霊力を受けてか、厳肅な気分になり、何か通常と異なるレベルの昂ぶりを覚えた。そしてぜひこの墳丘墓のことをもっと調べてみたいと思った。

帰宅後、やさしそうな本を二、三冊選び目を通してみた。そしてこの墳丘墓は、弥生時代の画期的な遺構であることを知った。そのことについて、本の中で私が共感した事柄のみに基づいて独善的にまとめてみた。ご批判を受ける点もあろうかと思うが、楯築遺跡で私の感じた幻覚であらうと解してご容赦いただきたい。

「吉備国の王誕生」

この墳丘墓は山頂に他の共同墓地から隔絶して単独に築かれている。しかも全長約八〇m。現在知られている弥生時代最大の墳丘墓であり、その形態も初出の双方中円形という個性的なものである。

このようなかつてない規模と様式の墳丘墓を造営できるということは、単なる一集落の首長を越えた存在であり、たとえば、眼下に見える上東遺跡の首長というだけでなく、もっと広い地域を支配する権力者の墳墓だろう。

彼が支配する範囲は、この楯築墳

丘墓で祀られた特殊器台と特殊壺（神聖な酒を満たし、より高く捧げ、畏敬の念を表現するための大型化した器台と壺）の出土する遺跡の広がりで見られる。その発見例は墳墓を中心に約五十カ所あり、ほとんどが備中・備前・備後・美作、すなわち吉備国の範囲にびったり重なる。

有力な首長たちの間で行う共通の葬送儀礼として特殊器台・特殊壺の供献はこの時以来行われたのであろう。

楯築遺跡の主はまさにそれら諸首長たちの上に立ち最初に王と呼ばれた人物だった。さらに、この吉備国の特殊器台・特殊壺は出雲平野からも出土している。

大和總向の箸墓など初期の古墳からも特殊器台・特殊壺、最古の直弧文をもつといわれる、亀石と同種の文様がデザインされた弧文円板が出土している。

ネットワークの存在が感じられるではないか。

楯築墳丘墓が造営されたのは、弥生時代後期後半（二世紀中頃から三世紀前半）とされている。二世紀末の「倭国大乱」の時をしのぎきり、国の版図をまとめた吉備は、居館の存在していたであろう上東遺跡の港から船出し、畿内の王たちと一緒に、

あるいは同じ瀬戸内勢力である対岸の讃岐国も加えて、いわゆる広域政治連合の形成に努力したのではないのか。

何のための連合か。それは、北九州の勢力が、ヒタヒタと吉備国に圧力を加えてくる。讃岐国と同じ立場だ。畿内諸国は東方の国々との争いに決着をみていなかったのではなからうか。そうして彼らの政治連合は、北九州勢力を制圧し、東方の国々との争いにも有利な決着を得たようである。卑弥呼が女王としてとして君臨していたのはこの時期と重なっているのではないか。

そして時代は楯築墳丘墓などを祖形として定型化した前方後円墳で代表される古墳時代へと移ってゆく。

吉備国最初の王は、このように社会の変革期（弥生時代）から国家形成の時期（古墳時代）に生きた人間である。

その系譜を継ぐ者たちはどうなったのか。畿内に出現する初期の大型前方後円墳に比較し、同時代の吉備の古墳のスケールは小さい。これは何を示すのか。何代か後に現れた吉備の大型前方後円墳である造山・作山古墳の被葬者は彼の子孫だったのだろうか。今後その解答を考えていきたい。

新春歴史研青春きつぷの旅 石の宝殿と明石の史跡を訪ねる

備陽史探訪の会創立二十周年記念の年の最初の行事は、歴史研青春きつぷの旅からスタートです。

今回の青春きつぷの旅は、謎の石造物、あの石の宝殿で腰を抜き、石垣の見事な明石城をじっくりと味わい、人丸神社に初詣という趣向になっています。

この旅に参加してお節料理で鈍った体を冬の凛とした空気できりりと引き締めてください。

【実施要項】

《開催日》一月九日(日・雨天順延)

《集合時刻》午前五時三〇分(厳守)

三原・尾道からでも間に合います。

《集合場所》JR福山駅改札口前

《講師》平田恵彦さん(事務局長)

《募集人数》四〇名(申込先着順)

《参加費》会員 三七〇〇円

一般 四二〇〇円

(青春きつぷ代・石の宝殿拝観料・傷害保険料・資料代を含みます)

《帰福予定時刻》午後七時三十分

《申し込み》平田事務局長宅へ

(TEL〇八四九―三三―三七八二)

《受付開始》二月二日(火)・

《受付時間》午後九時―一〇時

(厳守。なお日祭日は受付しません)

《その他》弁当・飲み物は各自持参。約一〇km歩きます。歩きやすい靴と、寒いので防寒具をしつかり着用してください。

【主な探訪予定地】

・石の宝殿：『播磨風土記』にも掲載され、古くから知られている謎の石造物で、生石神社の御神体。今度の探訪で最大の見どころ。

・明石城：現在の明石城は、大阪夏の陣後、小笠原忠政・忠真が徳川秀忠の命により築城した輪郭式の平山城。巽櫓・坤櫓(国重文)は伏見城から移築されたもの。

・織田家長屋門：旧船上城下にあった重臣住宅から明石城築城に際して移築された。市指定文化財。

・月照寺：空海の創建と伝える。後に覚証が大和の柿本寺から十一面観音像を勧請し、人丸山と号した。霊元天皇三十六歌仙手鑑・桜町天皇・皇短籍(国重文)を蔵する。

・人丸神社：祭神は柿本人麻呂。もとは明石城本丸にあった。後桜町天皇・仁孝天皇の宸翰・短籍(国重文)を所蔵。

・長寿院：浄土宗。小笠原氏が豊前小倉に去った後、明治維新まで明石城主となった松平氏の菩提寺で、直明から齊宜までの墓がある。

*他に明石神社・山王神社等を探訪。

新入会者紹介

CONFIDENTIAL 備陽史探訪の会

個人情報が含まれるため掲載できません。

事務局日誌

一〇月五日(火) 役員会。参加一八名。記念行事等について討議。

一〇月九日(土) 『古事記』を読む。

参加二三名。於福山市民図書館集會室。

一〇月一六日(土) 『備後古城記』

を読む。参加一五名。

一〇月二三日・二四日(土日) 一泊旅行。「豊饒の大地、播州平野をゆく」実施。参加四八名。

一月三〇日(土) 第一〇回郷土史講座「県北の古墳」を開催。講師は山口哲晶さん。参加一二名。於福山市民図書館集會室。

一〇月三十一日(日) 歴史研徒歩行事「錦秋の吉備路を味わう」を実施。講師は田口義之会長・平田恵彦さん。参加六六名。

一月二日(火) 役員会。参加一五名。記念行事等について討議。

一月六日(土) 「歴史小説読書会」開催。課題図書は司馬遼太郎著『泉の城』参加一名。

一月十三日(土) 『古事記』を読む。参加一八名。

一月十四日(日) 秋の古墳めぐり「備北の古墳を訪ねる」を実施。参加三九名。講師は古墳部会。

一月二〇日(土) 『備後古城記』を読む。参加一三名。

一月二七日(土) 第一一回郷土史講座「謎の多い毛利八箇国御時代分限帳について」を開催。講師は出内博都さん。参加二七名。於福山市民図書館集會室。

☆とくに断りがない場合は会場はすべて中央公民館。

平成一二年度総会開催

来年は創立二十周年の佳節を迎え、記念行事・記念出版など重要案件が多数あります。できるだけ多くの会員にご出席いただきますようお願い申し上げます。

【開催要項】

《開催日》

平成一二年一月三〇日（日）

《時間》

午後三時四十分～午後五時

《会場》

ふくやま市民交流館

福山市丸之内一―九一五
TEL〇八四九―二二―三三〇〇

（福山駅北口から徒歩約五分）

《主な承認案件と討議内容》

平成十一年度決算および活動報告・平成十二年度予算案および活動案・会費値上げとそれに伴う会則改正

《出席申し込み》

同封のハガキに氏名・電話番号と必要事項をご記入の上、一月二五日（火）までにご返送ください。

《委任状提出について》

総会にご欠席の方は、必ず、同封のハガキ裏の委任状にご記入の上ご返送ください。委任状提出・総会出席状況によっては総会が不成立になる場合がありますので、よろしくご協力をお願いいたします。

総会記念特別講演会開催

当会創立目的の一つに備後の古代山城常城・茨城の発見がありました。今回の講演は二十周年を迎え、創立の原点に帰る意味から企画したものです。講師は古代山城研究の権威、大廻・小廻遺跡を発掘された出宮徳尚先生をお迎えいたしました。

【実施要項】

《講師》

出宮徳尚先生
（岡山市教育委員会文化課専門官・古代吉備を語る会会長）

《演題》

「西日本の古代山城」

《開催日》

平成一二年一月三〇日（日）

《時間》

午後一時三〇分～三時三〇分

総会に先立って開催します。

《会場》

ふくやま市民交流館

《参加費》

無料

《出席申し込み》

不要です。講演会是一般公開。だれでも参加できます。

《開催日》

平成一二年一月三〇日（日）

《時間》

午後五時三〇分～七時三〇分

《会場》

備後遺族会館
福山市丸之内一―九一七

《会費》

三五〇〇円

《申し込み》

総会と同様です。

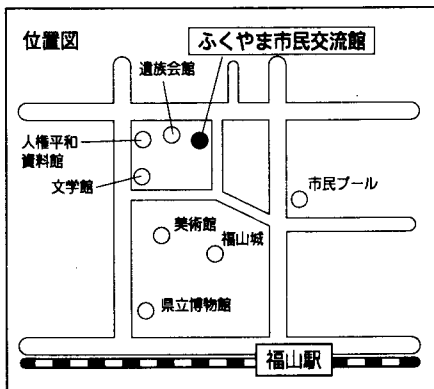
《キャンセル》

新年会のキャンセルは二九日（土）の午前中までお願いいたします。

昨年は当日のキャンセルが多数出てとても困りました。今回、当日キャンセルされた方には、折詰代金負担として二五〇〇円いただきます。

★都合により、今回は総会・記念講演会と会場が異なりますのでご注意ください。会場間の移動は徒歩二分程度です。

なお、ふくやま市民交流館・備後遺族会館とも駐車スペースがありませんので、クルマでのお越しはご遠慮ください。



歴史小説読書会

【実施要項】

《日時》二月五日（土）
午後二時～四時

《会場》福山市中央公民館会議室

《図書》「吉川元春」浜野卓也著
PHP文庫 五七一円

《座長》種本 実さん（参与）

多数のご出席をお待ちしております。

復活！

古墳講座Ⅶ

【実施要項】

《日時》一月八日（土）
午後七時～

《会場》未定

《内容》文献の抄読会
（やや専門的になります。）

《問い合わせ》

葉書のみにて、山口哲晶さんまでご連絡下さい。

会場等が決まりましたらお知らせします。

千七二一―〇九四二

福山市引野町二―一三―七

